

## 和文論文誌 B は優れた通信技術・研究を蓄える



通信ソサイエティ和文論文誌編集委員会

委員長 山里 敬也

「科学技術が急速に進歩発展をしていく情勢では既成技術者の技術水準は低下し勝ちであるから、学会がその専門の全技術者の水準の低下を防ぎこれを向上させる責任があるのではないか」。これは丹羽保次郎氏が1968年1月号の「電子通信学会誌」に寄稿した一文である。和文論文誌が誕生したのは、まさにその年で、それまで「電信電話学会雑誌」に掲載されていた論文を分離し、また名称も「電子通信学会論文誌」としてスタートした。当初、A、B、Cの3分冊からなり、B分冊は無線通信、電波伝搬・空中戦、マイクロ波・ミリ波、量子エレクトロニクス、電子管、テレビジョン、電子回路(B)をカバーした。その後、1972年にD分冊が追加され、A：基礎・境界、B：通信、C：エレクトロニクス、D：情報・システムの4分冊になった。1986年には、学会名称の変更に伴い、電子情報通信学会論文誌と呼称変更、1989年には論文誌の7分冊化に伴いB-I、B-IIを発行（1999年まで）、そして2006年からは、和・英オンラインジャーナルを配信、紙の論文誌はオプションになり、現在に至っている。

さて、丹羽氏は「学会が積極的に、また意識的に、日本の電子、通信技術の全体レベルをあげるように努力することが大きな使命ではなかろうかと信ずる」と

も書かれている。これに呼応するかのよう同号には小島哲氏が「会員が論文発表の場として雑誌に期待しているのは、一つには電子通信学会の権威ある論文委員会によって厳正な審査を経ること、他の一つは雑誌のいわゆるサーキュレーションが大きいことにあると考える」と書いておられる。和文論文誌Bは、これまでも、通信分野の一流の研究者を編集委員に迎え、通信分野の優れた技術・研究論文を掲載してきた。1989年会誌5月号巻頭言に永田稷氏が書いた「日本語の文献が読みたい！」にこたえるべく、今後も、優れた通信技術・研究を蓄えていきたいと思う。

やまざと かねや  
山里 敬也（正員：シニア会員） 昭63信州大・工・電子工卒。平2同大大学院修士課程了。平5慶大大学院博士課程了。工博。同年名大・工・電子情報・助手。平10同大・情報メディア教育センター・助教授、平16同大・エコトピア科学研究機構、平19同大・エコトピア科学研究所・准教授、現在に至る。平9より平10まで、ドイツカイザースラウテルン大・客員研究員。センサネットワーク、可視光通信、ITS、eラーニングなどの研究に従事。情報理論とその応用学会、IEEE各会員。平7本会学術奨励賞受賞。平17本会基礎・境界ソサイエティ特別功労賞受賞。平17、平19本会通信ソサイエティ活動功労賞受賞。IEEE Communications Society 2006 Best Tutorial Paper Award 受賞。現在、USN研副委員長、IEEE ComSoc SSC chair、2009 IEEE ICC WCS co-chair、2010 IEEE Globecom SAC co-chair。